

「専門職の資本」を育む



大学院教育学研究科長
福島 裕敏

いつもよりかなり早い春の訪れとなる中、教職大学院第7期16名が入学いたしました。また今年度は新たに3名の教員を迎えてのスタートとなりました。

周知のとおり、昨年末に中教審答申「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～」が出されました。また今年2月には、「校長及び教員の資質の向上に関する指標」と「青森県教職員研修計画」が一部改訂されました。これらにおいては、子どもたちの多様化や社会の変化のもと、子どもたちの学びとともに教師自身の学び（研修観）を転換し、「新たな教師の学びの姿」を実現していくことが求められています。

教育研究者アンディ・ハーグリーブスは、マイケル・フーランとの共著『専門職としての教師の資本』（2022）の中で、複雑化する社会において子どもの学びとウェルビーイングの改善に専門職として取り組む教師をサポートするためのリソース、すなわち「専門職の資本」を開発し循環し再投資していく必要があると述べています。この「専門職の資本」は、個々の教師の専門的力量に関わる「人的資本」、チームやグループの関係性の質に関する「社会関係資本」、物事を専門的見地から判断するために必要な知識やスキルに関する「意志決定資本」の三つからなっています。個々の教師の力量を高めていくことも重要ですが、そうした力量は学校内外の集団やネットワークを通じた教師同士の学び合いを通じて向上していくし、特に集団としての省察的实践により、専門職として自らの実践について自律的に判断する能力が高まっていくとされます。このように三つの資本は互いに結びついており、これらの共有・蓄積・循環を通じて「専門職の資本」は豊かになっていくのです。

教職大学院は、創設以来、「四つの力」の育成を目指してまいりました。上記の「専門職の資本」に照らせば、「自律的発展力」は「人的資本」に、「協働力」は「社会関係資本」に、「課題探究力」は「意志決定資本」に、「省察力」は「省察的实践」に、それぞれ深く関わっているといえます。教職大学院が「専門職の資本」の開発・蓄積・循環の一つの場となるべく、教員養成カリキュラムのさらなる充実を図るとともに、従来の中堅教諭等資質向上研修代替講座をリニューアルした「教師学び工房：グロウアップ講座①②」をはじめ教育研修の開発・充実に取り組んでいるところです。何卒、皆様のご理解ご協力を引き続きよろしくお願いいたします。

大学院教員を校内研修会等で**無料**でご活用ください！

教職大学院では、本大学院教員を謝金、旅費ともに無料で、青森県内の各校の校内研修会、小・中・高・特別支援学校の教育研究会等に講師として派遣する活動を行っています。

この活動は、本大学院の現職教員院生が、講師派遣の依頼を受けた大学教員に帯同して研修会等に参加させていただくことで、研修会等の運営の仕方を学ぶこと等を目的としており、本大学院の実習の一貫（だから無料）として行われるものです。

本大学院教員が助言や指導を担当できるテーマや内容は、本大学院のホームページに掲載しているリーフレットを御覧ください（「弘前大学大学院教育学研究科」で検索）。

講師派遣の申込方法は極めて簡単で、A4判申込用紙1枚に必要な事項を書いてFAXで送信するだけです。申込用紙の様式は、リーフレットと同じく、ホームページにあります。

なお、研修会開催後の面倒な報告書の提出等は一切ありません。

申込は随時（来年1月頃まで）受け付けますが、申し込みが早ければ早いほど、皆様の御希望に添える可能性が高くなります。ぜひ、御検討ください。



2024年度の教職大学院の入試について

2024度の新たな院生を迎える入試が下記のように決まりましたのでお知らせします。

第1期・・・推薦特別選抜・一般選抜：令和5年9月30日（土）

〔出願期間は8月28日（月）～9月1日（金）、説明会は7月26日（水）午後4時〕

第2期・・・推薦特別選抜・一般選抜：11月25日（土）

〔出願期間は11月6日（月）～11月10日（金）、説明会は10月25日（水）午後4時〕

第3期・・・一般選抜：12月23日（土）

〔出願期間は12月4日（月）～12月8日（金）、説明会は11月29日（水）午後4時〕

ただし、第1期入試又は第2期入試の合格者が募集人員18名に達した場合、コースによっては以降の募集を実施しない場合があります。

*詳しくは、ホームページの入試情報をご覧ください。

新任教員紹介

藤江 玲子 准教授



生徒指導・教育相談領域の授業等を担当します。長野県から参りました。

院生と出会い、時間を重ねる中で、心震える思いをすることがたびたびあります。現職教員と若い院生がそれぞれの立場で、子どもたちにとっての最善とは何か、何であったかを熱く語り合う姿を見ながら、なんとという素敵な方たち、素敵な大学院だろうという思いを重ねています。

私はこれまで、教育と臨床心理学を結ぶ立場から、子ども・若者の支援や研究を行ってきました。子ども・若者の内的世界に触れさせていただく機会も多く、その中で、子ども・若者の困難は社会に見えている以上に深刻であることを実感してきました。助けを求めることができずに、今も苦しんでいる子どもがいるはずです。一方で、先生方の誠実な取り組みが、多くの子どもたちを救っているのも事実です。子どもたちや先生方の助けとなる知を紡ぐこと、そして、子どもたちの幸せのために学校と社会が為すべきことを考えることを、院生の皆さんと一緒にしていきたいと思います。

柴崎 剛吉 准教授



この4月に実務家教員として着任し、あっという間に1ヶ月が経ちましたが、これまでの教育現場で培った自分の知識や経験が、教職大学院で学ぶ院生の皆さんの少しでもお役に立てられればという思いで、毎日を過ごして参りました。

県内の多くの学校では、開かれた学校、地域に根ざした学校などと形容し、これまでの閉鎖的な学校のイメージを払拭し、地域や企業、幼・小・中・高・特支・大など他校種との連携に力を注いでいます。背景には環境問題や国際情勢、人権問題等、世の中の動向の加速度的な変化によって生じる子どもたちの行動変容や環境変容に、学校の対応が迫られているからではないでしょうか。

先を見通すことが難しい今だからこそ、次代を担う子どもたちの教育課題について院生と共に探究することは大変意義深く、これからも彼らの学びを支えつつ、自らも共に学ぶ姿勢を持ち続け、教職大学院での貴重な毎日を積み重ねていきたいと思います。

村元 治 准教授



この4月に実務家教員として着任しました村元 治と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

教職大学院では、学校現場において、これまで経験したことをもとに、より実践的な視点で話題を提供したり、省察に関わったりしていきたいと考えております。

子どもたちの数は加速度的に減る一方で、その育ちは多様化しており、先生方は厳しい環境の中で日々尽力されております。教員の負担感に係り、このような状況ばかりが取り沙汰されておりますが、「先生」という仕事はとても魅力的であること、「先生」は本当にやりがいのある仕事であることについて再発見しながら、更には発信していきたいと思います。

また、子どもたちが安心して過ごせる学校生活を支えるための、今、教員に求められる4つの力、すなわち「省察力」「協働力」「課題探究力」そして「自律的発展力」を身に付けるために、理論と実践の往還・融合に取り組みながら、私自身も大学院生とともに研鑽し、微力ではありますが、教員の職能育成に努めて参ります。

入学院生からのメッセージ

ミドルリーダー養成コース

安達 大樹（青森市立甲田中学校）



教職大学院で学ぶ機会を与えていただき、講義や演習等を通して、じっくりとこれまでの自分を改め、これからの自分について深く考

えることができ、感謝の気持ちと共に、充実感のある毎日を送っています。この教職大学院には、私達の学びを真剣に支え、真摯に向き合ってください先生方、そして校種や年齢に関わらず、互いに尊敬し合いながら語り合うことができるミドルリーダー養成コースやストレートマスターの皆さんがいらっしゃいます。この恵まれた環境のもとで共に学び、実践を通して研究していくことで、ぜひ子ども達や学校に還元し、地域や社会に貢献できるように、これからも日々精進していきます。

葛西 良城（青森県立弘前高等学校）



長年にわたり高等学校の教育現場におりましたが、この春から弘前大学教職大学院でもう一度学び直す機会を得ました。大学院では、こ

れまでの実践の中から得た経験を振り返り、理論的で体系立てられたものと照らしあわせることで新たな気づきを得たいと考えています。ここでの学びから教員として地に足の着いた指導ができるようになりたいと思います。日々新しい刺激を受け、不安な事もありますが、他校種の現職教員の皆さんやストレートマスターの皆さんとの学び合いの中で充実した時間を過ごしています。貴重な時間を無駄にする事の無いよう研鑽を重ねていきたいと思っています。

舘田智久子（青森県立五所川原農林高校）



高校の教員として、それなりの年数を勤めてきましたが、自分自身の教育実践の方向性について、生徒にとって適切な指導なのか、教

育現場にとって意味のあるものになっているのかといった葛藤が多くなりました。そんなときにNITSと弘前大学教職大学院のコラボ研修に参加させていただく機会を得たことにより、省察力を高めたいという思いが強くなりました。ミドルリーダー養成コースでは演習や実習を通して学校教育が直面する課題について、様々な校種や教育関連施設での実習を行い、実践研究という形で多面的に学びなおしを図ることができます。入学して2週間ほど経ち、早くも多くの課題に追われていますが、年齢的に気力と体力が維持できるチャンスは今しかないのです。先生方のご指導を頂きながら、教員に求められる4つの力を伸ばしていきたいです。

舘山 収平（平川市立尾上中学校）



縁あって、人生二度目の弘前大学への入学となりました。

教員としての経験を重ねるに連れて、自らの学びの足りなさをひしひしと感じ

ることがしばしばで、どこか頭の片隅には「大学院」の言葉が、常にあったようにも思います。今こうして、弘前大学教職大学院に身を置くことができていることに、どこか天啓めいたものを感じずにはられません。

学部時代の自分は、目先の楽しさを追求するばかりの毎日でした。教職大学院では、送り出されていた勤務校の先生方、共に学ぶストレートマスターの院生やミドルの先生方への感謝、そして「学ぶことのできる幸せ」を忘れず、よりよい研究と実践を追究すべく、日々を大切に過ごしていきたい。今は、その一心です。

奈良岡 幸輔 (六ヶ所村立尾駱小学校)

教職に就いて10年以上が経過しましたが、様々な面で自分の更なるスキルアップが必要だと感じていました。自分

が学び育った弘前に戻り、こうして再び学ぶ機会をいただいたことに感謝しています。学習指導要領の改訂やコロナ禍を経て、学校でも様々なことが変化し、その変化への対応が求められています。教育現場が抱えている様々な課題を、これまでの自分の経験や主観的に捉えたものだけでなく、大学院で学ぶ様々な理論や客観的な視点で捉えたものと往還・融合させて、より広い視野で捉えられるようになりたいと思っています。そして、大学院で学び得たスキルを教育現場に還元していけるよう、2年間という限られた時間を有効に活用し、日々研鑽に努めていきたいと思ひます。

原 文子 (青森県立森田養護学校)

日毎に、時には授業毎に、刻々と自分の考えや視野が刷新されていくことに充実を感じてやみません。様々なバックボーンをもつ教授の先生方や、院生の仲間たちとのやりとりを通じていつも刺激を受けています。このメンバーでしか得られない気づきがたくさんあるのだと思うと、貴重なご縁に感謝の気持ちで一杯です。

勤務校の子どもたちや先生方と共有したいことが既に色々あります。大学院を修了した際には、生徒・保護者・同僚をはじめとして、自分と関わる人を前向きに、そして良い影響を与えられるような…すなわち（講義で学んだことと言うなれば）個々人の「Well-being」に貢献できる教師になれるよう、今後とも研究と修養に励んでいく所存です。

増淵 健 (五戸町立五戸小学校)

私が教職大学院で学び始め、3週間が経ちました。たくさんの仲間とともに講義や演習を助け合いながら行っています。

さて、「知識基盤社会の到来」という変化の時代において、教員は不断に最新の専門的知識や指導技術等を身に付けていくことが重要とされています。こちらでの学びを通して、私は社会の変化に対応する学びをしていたのか、学び続ける教師像を体現できていたのか、身に付けなければならない資質能力はなにかと自問し「学びの精神」の根を広げ深めようとしているところです。昨今は「学び直し」という言葉がスポットライトを浴びています。私はこれまでの経験を踏まえ、大学院での実践研究を「学び深め」ていきたいと考えています。

村井千絵美**(五所川原市立五所川原第二中学校)**

教職大学院に来て3週間が経ちました。学ぶことの多さに埋もれそうになりつつ、同じ院生の方々から刺激をいただいて奮

闘する毎日です。

教職大学院が決まった際には、これまでの教員生活で悶々と抱えていた課題に対して向き合う時間と場所を与えていただいたと思いました。これまでの実践を振り返る機会とし、最先端の学びを獲得する絶好の機会を活かして成長できるように頑張ります。また、少しでも現場に還元できるように努めてまいります。

学校教育実践コース・教科領域実践コース

藤田 桃（学校教育実践コース）



私は、本学の養護教諭養成課程を卒業し、教職大学院に進学しました。

大学院で学ぶ理論と実践の往還のな

かで養護教諭としての専門性を高めるとともに、「研究ができる養護教諭」を目指しています。大学院で一緒に学ぶ現職の先生方や、同じ教員を目指す仲間たちからは、常に刺激を受け、新たな視点を得ることができています。2年間の学びを通して、児童生徒が安心して学校生活を過ごすことができるような保健室経営のできる養護教諭になるという、自身の目標の達成に向けて頑張ります。

安田 和未（学校教育実践コース）



私は弘前大学教育学部小学校コースから教職大学院に入學してきました。教職大学院に進学しようと思ったきっかけは

3年次の実習の際、個々の児童に合わせた授業づくりや学級経営についての知識が不足していると実感したからです。そのため、教職大学院では一人一人のニーズに合わせて多様な学びを提供するための支援について研究していきたいです。ミドルリーダーの方々との協働的な学びや理論と実践の往還を通して教師としての資質を身に付け、青森県で活躍できるような教師を目指して2年間一生懸命頑張っていきたいと思っています。

市川 幸亮（教科領域実践コース）



初めまして、この度弘前大学理工学部数物科学科から教科領域実践コースに進学致しました、市川幸亮です。学部の

4年間は主に確率論について学んでまいりました。学部生の時に行った教育実習にて、様々な子供達に関わったことがきっかけで、自分も教育に関する勉強がしたいと考え、教職大学院へと進学を決めました。自分は将来的に、数学を苦手とする生徒に対し、有益なアプローチをしていけるような教師になりたいと考えています。この2年間の学びの中で様々なことを吸収して、自分の理想とする教師像に一步でも近づけていきたいと考えています。

金谷理利果（教科領域実践コース）



本学部の家庭科から教科領域実践コースに進学いたしました、金谷理利果です。入学時から憧れていた教職大学院に進学

できて、とても光栄に思っています。教職大学院では、教職大学院の最大の特徴である様々な授業を通じて現職の先生方と教育に関わる協議やストレートマスターの院生との意見交換から得られる視点を大切にしたいです。これから訪れる多くの経験や実習を重ねながら、自分の目指す授業づくりを段階的に考えていきたいです。

我満陽妃（教科領域実践コース）

教科領域実践コースに進学しました、我満陽妃です。教育実習を通して、教師になりたいという思いが強まった一方、

教職に対する知識や能力のなさを実感し、教職大学院への入学を決めました。講義についていけるか不安でしたが、現職の先生方や仲間と意見交換しながら学び合う時間は、自分にはない視点や考えに触れることができ、自らの考えを深めることや新たな気づきにつながり、とても貴重な時間だと感じています。学ぶ機会をいただけたことに感謝し、教師の土台となるような力をつけるため、講義や実習を通して、多くのことを吸収し、知識や経験を実践で生かせるように取り組んでいきたいと思っています。二年間、よろしくお願いいたします。

瀧本 誠博（教科領域実践コース）

教科領域実践コースに進学しました、瀧本誠博です。本学部の小学校コースに在籍し、日本史ゼミに所属していま

した。教職大学院に進学するきっかけとなったのは、学部時代の教育実習での課題が多く、そのまま教員として働くことに不安を感じたからです。教職大学院では、理論と実践の往還・融合に力を入れており、そこにとても魅力を感じました。また、現職の先生方と一緒に学ぶ機会があり、十分な準備をして教員を目指したいと思いました。この貴重な2年間で大切に、教員になるための研究と学びに努めていきたいと思っています。

成田 秀斗（教科領域実践コース）

私は、学部在学時の教授とのやりとりの中で自身の学校教育に関する知識の不十分さを痛感し、教職大学院への進学を

決めました。学部を卒業してそのまま教育現場に出ることへの不安感が自分の中に大きくありました。まだ教職大学院に入って数日しかたっていないのですが、ここでの学びはとても充実しており、毎日新しい発見でいっぱいです。M1のストレートマスターとの交流だけでなく、現職の教員であるミドルリーダーとともに学ぶことが一番の勉強になります。学びに貪欲になり、自分の不安がなくなるための2年間にしたいと思っています。

佐藤 大智（特別支援教育実践コース）

私が入学を志した理由は、学部時代の講義や実習を通して関心を持った、知的障害のある生徒のキャリア教育を中心に、

教育についてさらに深く学んでみたいと感じたからです。入学した日は不安でいっぱいでしたが、『特別支援教育研究』の編集長でいらっしゃる菊地一文先生をはじめ、素晴らしい教授陣と熱い教育観を持った先輩方が迎えてくださり、一層やる気みなぎっています。

観察実習では、生徒が授業や作業学習に熱心に取り組む姿が印象に残りました。私は、どの生徒にも勤勉さや、目標に向かって頑張る気持ちが内在していると信じています。そのような生徒の気持ちを引き出すため、必要な手立てを組みつつ、生徒と一緒に挑戦できる教員になれるよう、「情熱と感謝」を忘れず真面目に、丁寧に、諦めず日々精進して参ります。

教育実践研究発表会（年次報告会・最終報告会）を開催

—県内外からの参加者200名余り—

令和5年2月13日（月）、青森県総合学校教育センターを会場に、「対面」と「オンライン」併用による「教育実践研究発表会」を開催いたしました。前年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、オンラインのみでの開催を余儀なくされたこともあり、対面での実施が期待され、令和4年度は、幸い感染症も小康状態で希望通りの開催となりました。教育委員会・教育機関関係者、院生、修了生、現場の先生方、大学教員、学部学生にオンライン参加者、そして県総合学校教育センターの皆様総勢約200名での開催となりました。



この発表までに院生は、まず「教育実践研究法」という授業において研究の進め方を段階的に学んでいきます。1年次には、研究の意義、リサーチクエスチョンの立て方、研究倫理、エスノグラフィとその技法等研究の基礎を学び、先行研究、理論研究、実習やゼミ等を通して教育実践と仮説検証を行い、1年次の最後に「年次報告」を行います。

2年次には、これまでの実践上の課題を焦点化し、仮説の修正等を行い、実践研究を進め、個別ゼミや全体ゼミにて様々な視点から意見ももらい、11月上旬に「中間報告会」を行います。「中間報告会」で明らかになった課題をもとにさらに実践研究を進め、考察し成果と残った課題を明らかにし「最終報告書」とプレゼン資料を作成して、教育実践研究の集大成でもある「最終報告会」に臨みます。

教職大学院では、1年次前期に、授業づくり、生徒指導、教育課程、特別支援教育、インクルーシブ教育システム、教科教育法、学校と教員をめぐる動向、教育における社会的包摂等の授業や、県教育庁を始め各教育施設での観察実習等を行い、多面的・多角的にインプットとアウトプットを繰り返し、対話により多くの知見を獲得しつつ課題意識を高めていくことで、リサーチクエスチョンにつなげていきます。「教育実践研究発表会」では、研究の成果を発表し、質疑応答を通して生み出された知見を共有します。授業や様々な体験、調査研究、省察議論、発表会等を通して教員として必要な「自律的發展・課題探究・省察・協働」の4つの力がバランスよく育まれ、教師としての体幹が鍛えられていくものと考えています。

今回、この発表会には、県内はもとより北海道、岩手県、東京都、群馬県、神奈川県、滋賀県、大分県等、全国各地からオンラインでもご参加いただき、多くの忌憚のないご意見を頂戴いたしました。多角的な視点からの御指摘とそれによる気付きは宝であり、今回御参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。



最後に、今回の教育実践研究発表会に際し、現場の目線でご助言・ご講評くださいました弘前市立第三中学校長 成田隆道先生、弘前市立新和中学校長 神田昌彦先生、弘前市立第一中学校長 横山晴彦先生、県立青森西高等学校長 下川原堅藏先生に心からお礼申し上げます。

また、ご挨拶いただきました県教育長様を始め、院生に多くの気付きと励ましをくださった県教育委員会の先生方、発表を支援してくださった県総合学校教育センターの皆様心から感謝申し上げます。

令和5年度弘前大学教職大学院 中間報告会・教育実践研究発表会

- ①中間報告会 期日：令和5年11月11日（土）
会場：弘前大学教育学部
 - ②教育実践研究発表会
期日：令和6年2月13日（火）
会場：青森県総合学校教育センター
- ※いずれも「対面」と「オンライン」によるハイブリッド開催となります。

〈編集・発行〉

弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻
(教職大学院)

〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地

Tel 0172-36-2111(代表)

メールアドレス k-daigaku01@hirosaki-u.ac.jp